ユニセフ 子どもネットニュース

2002秋 NO.2

発行者：ユニセフ子どもネット事務局　財団法人 日本ユニセフ協会　広報室　〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス
でんわ：03-5789-2016　ファックス：03-5789-2036　電子メール：jcuinfo@unicef.or.jp

unicef 財団法人 日本ユニセフ協会

ユニセフトピックス

6月19日ワールド・サッカー・デー

すべての子どもたちがサッカーを楽しめる世界にしよう

アフガニスタン

2001年11月、ユニセフと国際サッカー連盟（FIFA）は、子どもたちのために世界的なパートナーシップを結び、2002FIFAワールドカップ™期間中の6月19日を、「子どものためのワールド・サッカー・デー」と決めました。

日本では、東京の国立競技場を中心に全国の10都市でJリーグの選手などが参加して、子どものためのサッカーイベントがひらかれました。子どもたちはサッカーを楽しむ一方、「子どもを差別しない」「すべての子どもに教育を」「子どもたちを戦争からを守ろう」など、「子どものための10の約束」を子どもたちがアピールするセレモニーもおこなわれました。

世界では、アフガニスタン、バングラデシュ、中国、韓国、チェコ、モザンビーク、パナマ、ポーランド、シエラレオネ、ソマリア、南アフリカ、アメリカ合衆国など多くの国ぐにで子どもたちがサッカーを楽しむイベントがひらかれました。

©UNICEF Afghanistan/June2002

ワールド・サッカー・デー、アフガニスタン・カブールのオリンピックスタジアムには、市内２つの子どもサッカーチームのメンバーが集まりました。少年たちは、ブラジルやイングランドカラーのユニフォームを着ています。ユニフォームは大使館や援助機関から寄付されました。

ユニセフの支援を得て、アイルランドのNGO「ゴール」がピッチを修繕し、用具をそろえ、地元のスポーツ好きの人たちと準備を続けてきました。それでも、スタジアムのピッチは、ぼこぼこで、ひかえの選手が待つ日かげもなく、ゴールにはネットがありません。ピッチを示す白線もところどころ消えています。

「ベッカムが最高だよ」ひとりの少年が自信たっぷりに言います。10分後、8歳のロナウドファン、モハメド・シカブから激しいタックルを受けます。速いペースで試合は進み、ボールがピッチをいったりきたりします。観戦にやってきた100人ほどのサポーターがどよめきます。試合は真剣そのものですが、雰囲気はとても友好的です。ファウルはたった3つだけ、審判がカードに手をのばすことは一度もありませんでした。このスタジアムで、タリバン政権による公開処刑がおこなわれていたときから、まだ1年もたっていません。今日、その恐怖の舞台は、チームワークと友情の舞台に生まれ変わりました。スポーツは、ともに生きること、違いがあっても平和的に解決すること、そして競いあうことは必ずしも対立ではないことを学ぶとてもよい方法です。女の子の間ではバレーボールが人気です。スポーツを通じて平和を築くとりくみは、ますます広がっていくでしょう。

©UNICEF Afghanistan/June2002

世界各地から

アグネス・チャンさん カンボジアを訪問

人身売買から子どもを守りたい

©日本ユニセフ協会／Shindo

日本ユニセフ協会大使のアグネス・チャンさんが、8月19～25日までカンボジアを訪問し、タイとの国境付近を中心に、売り買いされる子どもたちの実状を視察しました。

昨年12月の「第2回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」でも、「子どもの人身売買」は大きなテーマでした。

売られてしまった子どもたち。かれらの多くが、性的搾取のぎせいになったり、工場に閉じ込められて休むひまもなくひどい仕事をさせられたり、街でもの売りをさせられたりしています。

人身売買にあった子どもたちを保護し、社会で自立して生きていけるようにするためのセンターでアグネスさんがであった12歳の女の子ヴェドさんは、バンコクに売られ、花売りをさせられていたつらい経験を話しながら、一度もほほえむことはありませんでした。アグネスさんは、「こんなひどいことから子どもたちを守りたい」と報告会でうったえました。

カンボジア

>> アフリカ南部の国ぐにに食糧危機

干ばつで荒れはてたトウモロコシ畑にたたずむ4歳の少年アヤンダ。ジンバブエの首都ハラーレから550キロメートル離れたベズ村にくらす 1

©UNICEF/HQ02-0297/Giacomo Pirozzi

アフリカ南部の6カ国（ジンバブエ、マラウイ、ザンビア、モザンビーク、レソト、スワジランド）では、干ばつや悪天候のために農作物の収穫がへり、たいへんな食糧難が予想されています。食糧を保管しておく施設がじゅうぶんでなく、2年続いた悪天候のため、貯蔵されていた食糧も底をついています。この地域では、すでに770万人が飢餓の危機にさらされており、その数は来年の3月までに1280万人にまで増えると考えられています。ユニセフをはじめ、さまざまな国連機関などが支援をはじめていますが、食糧を支援するだけでは十分ではなく、栄養、飲み水・衛生状態をよくすること、荒れてしまった農業をふたたび復活させることなど、さまざまな支援が必要とされています。

>> 洪水に悩まされるアジア諸国

INDIA　VIETNAM

今年の夏、ヨーロッパで起こった洪水が注目を集める一方、アジア諸国でも洪水の被害が広がりました。インド、バングラデシュ、ネパールのヒマラヤ山脈のふもとに広がる地域でおこった洪水では、900人近くが亡くなり、250万エーカーものトウモロコシ畑が流されました。この3カ国では6月にモンスーンの雨がふりはじめてから、何度も被害がおこっています。また、中国でも大きな洪水の被害が報告されています。

ベトナムでは、南部のメコン川のデルタ地域で非常に危険なレベルにまで水位があがり、3年連続の大きな洪水が予想されています。ユニセフは、洪水が予想されている地域で、避難や安全のための資料をくばったり、水上診療所をつくる支援をしたりしています。

ユニセフトピックス 1
子どもたちの声が届いた！「国連子ども特別総会」に世界の子どもたちが参加 2-3
地図で見る世界の子どもたち　「HIV/エイズを知っていますか？」 4-5
ユニセフではたらくこと…！　～子どもネットワーカー記者　ユニセフスタッフにインタビュー～ 6-7
REPORT&INFORMATION 〈報告とお知らせ〉 8

子どもたちの声が届いた！

子どもたちにふさわしい世界を築こう！

子どもフォーラムの参加者たち
©UNICEF/HQ02-0074/Susan Markisz

「国連子ども特別総会」に世界の子どもたちが参加

2002年5月8日から10日まで、アメリカ合衆国のニューヨークで、「国連子ども特別総会」がひらかれました。この会議は、今後およそ10年の間に子どもたちのために世界が何をするのかを約束する大切な会議で、ユニセフもその成功に向けて長い間とりくんできました。

会議には、60カ国以上の首脳、およそ180カ国の政府の高官、250人以上の各国の国会議員、そして政治以外の分野から合計6000人もの参加者が集まりました。1989年に「子どものための世界サミット」がひらかれてから、世界の子どもたちの状況はどれだけよくなったのか、それとも悪くなったのか、これから何をしなければならないのか、真剣な話し合いが続きました。

この会議が子どもたちにとって大切だった理由がもうひとつあります。それは、子どもたちが初めて国連総会に正式に参加したことです。世界153カ国から集まった404人（女子241人、男子163人）の子どもたちは、本会議直前の5月5日～7日にひらかれた「子どもフォーラム」に参加しました。司会も子ども、出席者も子ども、最初のゲストスピーカーを除いてまったくおとなのいない、3日間の子どもたちだけの会議でした。そして、「国連子ども特別総会」の開会式で、子どもの代表2人がスピーチをおこない、「国連子ども特別総会」が最終日に会議の結論とした文書「子どもにふさわしい世界」の内容にも大きな影響を与えました。

子どもたちは、この大切な国際会議で、どのように活躍したのでしょう。元ユニセフ子どもネットワーカーで、「国連子ども特別総会」に政府子ども代表のひとりとして参加した田中郁江さんに報告してもらいました。田中さんは、昨年12月に横浜でひらかれた「第2回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議」にも参加し、そのときの体験をこの会議で発表しました。

国連子ども特別総会開会式
©UNICEF/02-0144/Susan Markisz

子どもフォーラム開会式で自作の“世界が必要としていること”という歌をひろうした10歳のシャウン・トンプソンくん。
©UNICEF/HQ02-0067/Susan Markisz

田中郁江さんからの「子どもフォーラム」報告

子どもフォーラムに参加する田中郁江さん（左）©日本ユニセフ協会

子どもフォーラム 1日目

初日は開会式の後、8つの地域グループごとに集まって子どもフォーラムの目標や話し合いたいテーマを決めました。日本は東南アジアのグループに入り、話し合いのルールは「だまって人の話を聞く」、そして目標は「楽しくやろう！」ということに決まりました。話し合いたいテーマには、教育、商業的性的搾取、健康問題の順に多く意見があげられました。

午後には「国連子ども特別総会」とは何か、この総会が最後にとりあげようとしていた文書“A World Fit for Children（子どもにふさわしい世界）”の案にどんなことが書かれているか、などの説明があり、この総会がひらかれる理由やこの10年間の子どもの状況、会議で何がおこなわれるのかを聞きました。メディアによる取材についての注意などがあった後、最後に子ども参加者全員で写真を撮り、1日目は終わりました。

©UNICEF/HQ02-0077/Susan Markisz

2日目

2日目は、次の4つの「委員会」を決めることからはじまりました。「委員会」には各地域グループからひとりずつの委員を出します。｜メディア担当（取材に応じる）、｜閉会セレモニー担当、｜話し合いの評価担当、｜話し合いの内容をまとめる担当。

その後は、｜教育、｜子どもの兵士、｜参加と協力、｜搾取と暴力と虐待、｜HIV/エイズ、｜貧困、｜環境、｜健康、の8つのテーマグループに自由に分かれ、話し合いをおこないました。私は｜搾取と暴力と虐待グループに参加し、日本には子どもの商業的性的搾取を目的にアジアに出かける男性がいるということを発表しました。私のグループにはアフリカやインドなどの子どもたちが多く集まり、子どもの労働やストリートチルドレンについて多く話されました。ユーゴスラビアから来ていた子が、テレビで放送されているセックスや暴力のシーンのことを問題にしていたことが印象に残っています。

話し合いの後、全員で集まり、話し合われた内容を発表しました。教育についての発表では、「もっと学校をたてるべきだ」「先生の数を増やさないと」などの意見が多く、それを聞いて日本の教育の問題点、たとえば「子どもの基本的な権利について知らない」などとはすこし次元がちがうな、と感じました。

子ども記者からの質問に答えるキャロル・ベラミーユニセフ事務局長。子どもたちは会期中各界のリーダーたちと積極的に話しました。

©UNICEF/02-089/Susan Markisz

3日目

最終日は、本会議中のサイドイベントの参加者を決めました。本会議場でおこなわれる各国からの発表やパネルのほかに、会場となっていた国連ビルのさまざまなところで、関連のサイドイベントがおこなわれる予定だったのです。

私は昨年12月にひらかれた「第2回 子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議（横浜会議）」のフォローアップイベント“Beyond Yokohama（横浜をこえて）”に参加することになりました。このイベントは9日の午後ひらかれ、横浜会議のビデオ上映後、10分間の子ども代表によるプレゼンテーションの時間に、私と、もうひとりの日本からの政府子ども代表だった澤野佳子さんとアフリカから来ていた男の子とで、ひとつのスピーチを発表しました。スピーチの内容は、私と澤野さんの強い希望で、横浜会議で発表された子ども・若者代表によるファイナルアピールを盛り込むというかたちになりました。ファイナルアピールのポイントの中からいくつかを補足説明しながら、子どもたちが何をアピールしたかを伝えました。横浜会議の子ども・若者代表によるファイナルアピールは、最終的に国連文書となり、各国に正式な記録文書として配られました。それも成果のひとつになったと思います。

「子どもフォーラム」最終日の閉会式はすごい盛り上がりでした。希望者をつのり、1カ国1～2分ほどの出し物が次から次へとおこなわれました。民族衣装を着て踊ったり、歌ったりする子どもが多く、日本の子どもたちは、はっぴやゆかたを着て三本締めで会場を盛り上げました。

子どもフォーラムの最終日。それぞれの民族衣装などを身につけた参加者達が、風船をとばしました。
©UNICEF/HQ02-0119/Susan Markisz

国連子ども特別総会での子どもたち

United Nations Special Session on Childlen

トピックス Topics

「わたしたちにふさわしい世界」

©UNICEF/02-0148/Susan Markisz

「国連子ども特別総会」の初日、子どもたちによるスピーチを発表したのは、ボリビアから来た13歳のガブリエラ・アリエッタさんとモナコから来た17歳オードリー・シェイヌさんです。さまざまなところで権利を守られずにくらしている子どもたちの代理として、ふたりは力強いメッセージを世界に伝えました。

スピーチ　「わたしたちにふさわしい世界」（一部抜すい）

「わたしたちは世界の子ども。わたしたちは、搾取や虐待の犠牲になっている子ども。わたしたちはストリートチルドレン。わたしたちは戦争の子ども…。わたしたちは、これまで声を聞かれることのなかった子どもです」

「わたしたちにふさわしい世界がほしいのです。子どもにふさわしい世界は、すべての人にふさわしい世界でもあります」

「わたしたちにふさわしい世界では…

- **子どもの権利が大事にされます**
- **搾取も虐待も暴力もありません**
- **戦争もありません**
- **必要な医療が受けられます**
- **HIV/エイズがなくなります**
- **環境が守られています**
- **貧困の悪循環はありません**
- **教育が受けられます**
- **子どもたちが積極的に参加することができます」**

「わたしたちは約束します。おとなになったときにも、子どもである今と同じ情熱をもって、子どもたちの権利を守ることを」

「わたしたちは世界の子ども、生まれや育ちは違っても、共通の現実を分かち合うのです。 あなたがたは子どもを未来と呼びます。けれどもわたしたちは、今を生きる存在でもあるのです」

元子どもの兵士の証言

©UNICEF/02-0113/Susan Markisz

「14歳のとき、軍隊に入りました。家族はひとりのこらず殺されてしまい、復しゅうしようと思っていたのです」

「国連子ども特別総会」の前日に、国連安全保障理事会でひらかれた「紛争下の子ども」についての会合に、戦争で被害を受けた3人の子どもと若者が参加し、自分たちの過酷な体験を話しました。イズマエルは3年間シエラレオネの内戦を戦いました。「他の人を思いやるような人間的な気持ちはだんだん消え、銃を持っていることが心地よくなっていきました」イズマエルは当時のことをそうふりかえります。その後、リハビリテーション・センターで学校に通うようになってはじめて、自分のしたことに対する罪の深さと恥ずかしさを感じるようになったといいます。ようやく社会復帰したイズマエルは、現在アメリカで勉強しています。

この会合で、アナン国連事務総長は、「あまりにも長い間、子どもたちが兵士として使われてきたことが悔やまれます」と話し、国連が子どもの兵士をなくすためのあらたな対策をすすめると発表しました。

9400万人の「SAY YES!」

国連本部で「Say Yes」の誓いをするアナン国連事務総長と子どもたち

©UNICEF/HQ01-0155/Nicole Toutounji

5月7日、「子どもフォーラム」の最終日には、この総会に向けて全世界でとりくまれていたセイ・イエス・フォー・チルドレン・キャンペーンで集まった署名の数が発表されました。その数は、194か国から合計9400万以上。これだけの人びとが、子どもたちへの思いを署名というかたちで明らかにし、子どものために行動を起こすよう声をあげたのです。世界のおよそ60人にひとりはこの署名に参加したことになります。

署名の数は、ネルソン・マンデラ氏とグラサ・マシェル氏に報告され、世界中の人びとの声は、集まった全世界の各界のリーダーに大きな影響を与えました。ユニセフ子どもネットワーカーが集めた署名の数は8,804でした。

マンハッタンは子どもでいっぱいに

©UNICEF/Stacy Sullivan

5月8日には、ニューヨークのマンハッタンは、「子どもの権利を守ろう」という子どもたちのパレードでうめつくされました。100カ国以上の子どもたちが、自分の国の国旗や、「世界的な教育キャンペーンを」と書かれたオレンジ色の風船、「子どもの兵士をなくそう」というプラカードを持ったり、「子どもの労働をなくそう」と書かれたTシャツを着たりして行進しました。行進しながら、「わたしたちは何がほしい？」「子どもの権利！」というメッセージを大声でうったえました。沿道では、おとなたちが拍手を送り、商店やレストランから出てきた人が子どもたちを応援しました。

★郁江ちゃんの感想★

子どもフォーラムと子ども特別総会に参加して

率直な感想として、「子どもフォーラム」は、問題はあったけれど、子ども参加をはじめておこなった国連総会にしては、成功したといえるのではないかと思います。なにしろ子どもが400人以上もいたので、収拾がつかず、何がおこなわれているのかよく把握できなかったり、通訳の問題などから時間がむだにかかってしまったり、ということが多かったです。しかし、それは何より「子ども参加」を常に念頭においていたからだと思います。決めごとがスムーズにいかず、時間がオーバーしていてもファシリテーター（司会者）は口を出さず、だまって見まもっていました。話し合いのときも、内容を重視するより、全員がかならず発言することに気を配っていました。それでも英語ができる人が多少有利であったことは事実ですが、横浜会議のような大きな混乱はなく終わったことに心からホッとした、というのが正直なところです。

だから、よく言えば「子ども参加」を本当に考えたフォーラムでしたが、悪く言えば内容の薄い話し合いだったと思います。しかし、世界中の400人の子どもが集まって内容の濃い話し合いをするのは本当にむずかしいと思うし、同じ想いを持った子どもたちが世界中から400人も集まってきたという事実だけでもすばらしいことだなと実感しました。横浜会議のファイナルアピールの時の感動がよみがえり、あの時のような一体感をまた実感できました。

「国連子ども特別総会」で約束されたこと

子どもの問題に対するとりくみとして、1990年代は「教育」や「健康」が中心となっていましたが、今回これに加えて「虐待・搾取・暴力」や「HIV/エイズ」があらたな課題とされました。また、思春期の子ども（およそ12～17歳）へのとりくみや、子ども参加がより大切にされました。

総会で約束された主なこと

保健について

- ○ 赤ちゃんや5歳になる前の子どもが命を失う割合を、2010年までに少なくとも3分の1へらし、2015年までには、3分の2へらす
- ○ 赤ちゃんを妊娠したり出産したりするお母さんが命を失う割合を、2010年までに少なくとも3分の1へらすとともに、2015年までには4分の3へらす
- ○ 2015年までにすべての子どもたちが基礎的な保健サービスを受けられるようにする

教育について

- ○ 2010年までに、学校に行くはずの年齢なのに学校に行っていない子どもの数を半分にへらし、10人のうち9人の子どもは小学校やその代わりになる場所に通えるようにする
- ○ 2015年までに小学校や中学校における男女の不平等をなくす
- ○ 2010年までに読み書きや計算のできるおとなの割合を50％増やす

HIV/エイズについて

- ○ 最も深刻な影響を受けている国は2005年、世界全体では2010年までに、15～24歳のHIVの感染率を50％へらす、という目標を実現するために、達成期限を定めた国内目標を2003年までにつくる。
- ○ HIVに感染している赤ちゃんや幼い子どもの割合を、2005年までに20％、2010年までに50％へらす

INTERVIEW

子どもネットワーカー記者
ユニセフスタッフにインタビュー

ユニセフで はたらくこと…！

今回、ユニセフ子どもネットワーカー記者は、ユニセフに入って16年、ナミビアやモルディブ、バングラデシュなどの事務所を歴任し、現在はユニセフのニューヨーク本部で上席事業資金担当官を務めるベテランスタッフの久木田 純さんにインタビューしました。この4月まで久木田さんが副代表をつとめていたバングラデシュ事務所で働くユニセフに入って2年の市川奈緒美さんも飛び入り参加してくださいました。さて、おふたりからネットワーカー記者はどんなことを聞いたのでしょうか？

自分の信じていることができるのは国連の職員

Q 上席事業資金担当官とはどのような仕事ですか？

また、市川さんのお仕事は？

A：（久木田さん）世界中で活動するユニセフの資金は3分の2がいろいろな国の政府から、3分の1が民間から提供されています。日本だと日本ユニセフ協会が集めているのが民間のみなさんからの募金です。ユニセフの資金は自由な拠出金です。各国がユニセフの仕事がいいと思えば出す。よくなければ出さないというものです。今、ユニセフ全体で1年間に10億米ドルぐらい（日本円でおよそ1200億円くらい）の資金をいただいています。その中でわたしは政府からよせられる資金を担当しています。日本、韓国、オーストラリア、ニュージーランドの政府やアジア開発銀行、世界銀行などの国際金融機関からの資金を担当し、協力関係をたもつ仕事をしています。

（市川さん）わたしはバングラデシュ事務所のプランニング・セクションという部で働いています。事務所全体の仕事を見つつ、政府と相談しながら、子どもについてどのようなプロジェクトをすすめていったらいいかを決めたり、子どもや女性の状況について全国調査をしたりしています。それから、バングラデシュの“女性と子ども省”と協力し、子どもの権利が守られているかどうかを調べて、国連の「子どもの権利委員会」へレポートを送るという仕事もしています。

Q ユニセフで働こうと思ったきっかけは何ですか？

A：（久木田さん）小さいころは理科少年だったのですが、高校生のときに、人間のこと、世界はなぜこんな状態なのかということをもっと知りたいと考えるようになりました。それから海外で仕事をしたいとも考えるようになったので、英語を勉強しはじめました。高校生くらいだとちょうど「自分とは何か」なんてことを考えるようになる時期ですよね。わたしは、自分自身の力がついていくことと人類の平和や発展、どちらもがかなう生き方をしたいと思いました。海外に出て仕事をするには、特派員になったり、商社マンになったり、外交官になったり、いろいろな方法があります。でも、商社で働いたらその会社のため、外交官なら国益を考えなければならない。特派員なら自分は手を出さずにありのままを報道するという役割があります。そう考えると、自分の信じていることをそのままやれる、そしてその仕事が人類全体の幸福につながる仕事は国連職員だと思い、大学2年のころから国連職員をめざしました。

（市川さん）小学校のころに「ユンボギの日記」という昔の韓国のストリートチルドレンのことを書いた本を読みました。そのとき、「世界にはこんなに困っている人がいる。わたしには何ができるのか」と考えました。それで、人を助けられるような仕事や、世界が平和になるような仕事につきたいと思うようになりました。今は、外務省がおこなっているジュニア・プロフェッショナル・オフィサー（JPO）という国連に日本人の職員を派遣する制度で、ユニセフで働いています。

Q ユニセフ職員のご家族はどのように生活しているのですか？

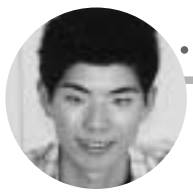
A：（市川さん）わたしは独身ですが、国連で働きつづけたい、という独身女性にとって、家族を持つことは大きな問題です。2、3年ごとに国から国へ移動する生活では結婚はむずかしいのです。将来わたしの両親が年をとったときにどうするかなど、日本に残している家族の問題もありますね。わたしの母はわたしを手伝うために一年間バングラデシュで一緒に生活してくれました。現地のボランティアに参加したりして、バングラデシュでの生活を元気に楽しんでいましたけれどね。

（久木田さん）わたしには妻と高校生の息子、小学生の娘がいます。国連職員の家族は本当に大変です。何年かごとに生活や言葉がまるっきり変わりますし、わたしが出張している間は、自分たちだけで生活しなくてはなりません。

でも、日本では経験できないこともたくさんあります。インターナショナルスクールに通う娘は英語も日本語もじょうずです。ストリートチルドレンなどにであって、そのくらしをよく知っているので、むだ使いをしたりわがままを言ったりは少ないと思います。息子はもう4カ国で生活しています。中学の卒業論文でストリートチルドレンについて発表しましたが、よくできていました。妻はバングラデシュで日本人のボランティア会を立ち上げたり、NGO（民間の活動団体）についての本を何冊か翻訳しています。現地のNGOについてはわたしよりもくわしいですね。

Q もし、危険度の高い地域への派遣が決まった場合はどうするのですか？

A：（久木田さん）ユニセフは、子どものためなら何でもやる機関です。また、もっとも現場に近い国連機関といわれています。世界の子どもたちのことを知ってほしい、子どもたちのために何か手伝いたい、そのためなら命をかけてもいい、というのが国連職員だと思います。大切なのは、そういった使命感や信念です。わたしはどこへでも行って働きたいと思います。



開発途上国の問題って？

Q バングラデシュでは子どもたちはどんなようすですか？

A：（市川さん）バングラデシュは、北海道の2倍ほどの大きさのところに、日本より多くの人びとがくらしています。（データブックを取り出して）では、分野ごとに説明しましょう。

健康について

バングラデシュでは、1000人生まれたうち54人は1歳になる前に命を失っています（2000年）。5歳まで生きられる割合はもっと低くて、1000人のうち82人は亡くなっています。この割合、日本だと4人くらいですね。命を失う原因はたとえばげりです。脱水症状をおこして亡くなります。手当てが遅れるととてもあぶないのです。また、かぜから肺炎になったり、最近は減っていますがはしかなど予防接種で防げる病気が原因のこともあります。

子どもたちが楽しく学べる学校づくりなどのプロジェクトもすすんでいます。©UNICEF/HQ96-0713/Noorani

教育について

小学校の就学率は男女とも約80%ぐらいです。そのうちの70%ぐらいが5年生まで進級しています。だから5年生になっているのは全体の約半分ですね。ただ、1クラスに90人も子どもがいるような状況で、あまり質のいい教育をしているとはいえません。小学校を出てもその半分くらいしか十分な能力を身につけられていない、と考えられています。

中学校に進むのはさらに一部です。特に女の子は、それくらいの年ごろになると結婚しなさいといわれて学校をやめてしまいます。男の子もお金がないから学校をやめて家のために働くことが多く、高校まで進む子どもは全体の20%くらいではないでしょうか。

水と衛生について

バングラデシュの農村やスラムでは水やトイレの問題をかかえています。©UNICEF/Water&Sanitation inBangladesh - 02

バングラデシュにはダッカやそのほかの都市をのぞいて水道がないので、ほとんどの人は井戸に頼っています。最近わかったことなのですが、その井戸の水が“ヒ素”という毒におかされていて、多くの人がヒ素中毒になっています。ユニセフはヒ素が出ないところまで掘った深井戸をつくったり、雨水を使うようにすすめたりしていますが、毎日使う水の問題なので、そう簡単にもいきません。

それから…、トイレはきたないです。たれ流しの状態だからきたないんだと思うんですね。農村では、ちょっと囲ったボックスみたいなものを建てて、その中がトイレになっています。トイレの下は池や田んぼです。その池では洗濯をしているし、子どもも泳いでいます。いけない、と思いますが、ほかにトイレはありません。農村やスラム地域ではなんと82%がこうした“いけない”トイレです。

働く子どもたち

バングラデシュでは、10人に2人ぐらいの子どもがフルタイムで働いていると考えられています。農村で農業を手伝う子どもが多くて、農村に住んでいる男の子が学校をやめる一番大きな理由になっています。仕事の内容では、都市部の子どもの方が危険な仕事についています。ユニセフは、子どもたちをなるべく危険な仕事から離し、教育を受けられるようにするための活動をしています。

（久木田さん）開発途上国の問題の多くは共通しています。まずは生きる、教育を受ける、そして社会に参加する、こうし

Profile

久木田 純さん

現在、ユニセフ本部上席事業資金担当官。ユニセフ・モルディブ事務所、ナミビア事務所、駐日事務所で仕事をしたあと、バングラデシュ事務所次長に。全事業の統括、政府やNGO、開発協力機関との渉外や資金調達を担当する。2002年4月より現職。

市川 奈緒美さん

現在、ユニセフ・バングラデシュ事務所プランニング・セクションのアシスタント・プログラム・オフィサー。国内外の一般企業勤務、NY国連本部にある平和維持活動（PKO）局でインターン、アジア開発銀行研究所などを経て、2000年からユニセフ勤務。

た子どもの権利を守ることがむずかしいのです。

今の世界は、日本や欧米など全体の20%ほどの豊かな国が、世界全体の富の85%を持っているという状況です。一番貧しい世界の20%の人びとは、1日に1米ドル（約120円）ほどの収入しかない中でくらしています。日本の人びとはその1万倍くらいの収入があります。大きな格差がありゆがんでいます。これを変えるのがわたしたちの仕事で、一番必要なことは貧しい人びとのエンパワーメント（力をつけること）です。何より子どもを力づけることが大切です。そして豊かな人びとの暮らしを変え、協力すること、それができれば、世界はよくなっていくと思います。

援助ってしてあげるもの？

Q 援助される側としてバングラデシュの子どもは先進工業国をどう思っていますか？

A：（久木田さん） 多分、援助されるというふうには思っていないと思います。援助する、してあげるという関係はユニセフは持ちません。子どもたちが予防接種に行くとき「痛くてやだな」とは思っても、それが援助されているとは思わないでしょう。ただ、大きくなったときに、あのときの学校や予防接種にはユニセフの支援があったんだな、ということに気づくことはあるでしょう。

豊かな国が貧しい国を支援するというのは、国際社会の一員としての責任です。ユニセフは、現地の人びととお互いに協力関係にあり、「子どものためになることを一緒にやりましょう」という姿勢で仕事をしています。おそらく、そのためにユニセフは現地で一番感謝されている国連機関ですよ。みなさんだって、ああしろこうしろと命令する先生より、あなたがたの意見を聞いて、こうしたら？ああしたら？と提案してくれる先生の方がいいと思うでしょう。同じことです。

（市川さん） わたしも援助をしてあげているとは考えません。みんなが健康で平和な生活をしてほしい、わたしと同じように人生にいろいろな選択肢がある生き方ができるようになってほしいと思うからするんですね。

子どもたちの笑顔があるから働ける

Q 日本より貧しい国ぐにが持っているよさとは何ですか？

A：（久木田さん） わたしはバングラデシュの農村が好きです。田んぼがあって、緑があって、生き返った感じがします。また、人情が豊かで人と人との関わり合いがあります。お茶を飲みながら話すゆったりした時間があるというのもいいです。

日本だって温泉に行ったり、刺し身なんか食べたりすると、いいなぁと思いますが、どの国に行ってもすばらしい風景があります。モルディブでは、夕日やかつお釣りの船、いるかがジャンプしている姿などを思い出します。ナミビアには砂漠の民がいて、髪を編んで、牛の脂や血を混ぜた赤いものをからだにぬっています。彼らが岩の上で夕方休んでいるシルエットなんて、本当に美しい。わたしたちにはないものがたくさんあります。

（市川さん） 何といっても子どもの笑顔ですね。子どもの笑顔があるからこそ、わたしたち職員は働いていけます。また、職場としての開発途上国は、チャレンジング、つまり挑戦しがいがあります。やったことの成果が見えやすい気がしますし、やったという実感もあります。それから、単純なことに喜びを覚えられるようにもなりました。たとえば「水が出た」とか「電気がついた」なんてことに。（笑）

子どもたちの笑顔にはパワーがあります。　©日本ユニセフ協会

Q 今までで一番印象に残ったこと、達成感を感じたことなどを教えてください。

A：（久木田さん） 開発途上国の子どもたちはみんないきいきとしています。それは多分、一生懸命生きていかなければならないからだと思います。学校に行けるなら、簡単なことでも一生懸命学ぼうとする、そんな元気があります。足りないことがあるから、補おうとする、それは人間の自然な力だと思います。日本の子どもには、だんだんそういうところがなくなってきています。スラムでも子どもたちがワーッと走り回っているのを見ると、その元気さに圧倒されます。そんな子どもたちから、パワーをもらっている気がするのです。この仕事をやっていてよかったなあと感じるときです。

（市川さん） バングラデシュの地方に行って、村の人や女性、学校の先生などに、これからどのようなプロジェクトをしたらよいかと聞いたことがありますが、本当に真剣にいろいろ話してくれました。バングラデシュのすべての人びとが、子どものことをよく考えていて、一緒に問題にとりくんでいこうとする姿勢がとても印象的でした。

首都ダッカの街を歩いていると、花売りの子どもや、路上で暮らす子どもをたくさん見かけ、自分の仕事が本当に役に立っているのだろうかと思ったりもします。でも、一生懸命話そうとしてくれたり、笑ってくれたりする子どもにであうと、やってきてよかったと思います。

100歳までの人生計画表をつくろう！

Q 日本の子どもたちに一番言いたいことは何ですか？

A：（久木田さん） まずは世界の状況を知ってほしい。本やニュースなどを見て、貧しい国と豊かな国との格差の構造や原因を知ってもらいたいと思います。次に今何をすべきかを考えて、それに基づいた勉強をしたり、仕事をしたりしてもらいたいですね。

実はわたしは「100歳までの人生の計画表」を書いていつも持ち歩いているのですが、ぜひみなさんにもやってほしいですね。計画表の中に、「××歳までにこれをする、こうなる」ということと、そのためにやらなくてはならないことを書き込むんです。わたしは、何歳で国連職員になり、いつ結婚して（これはちょっと予定より早くなってしまいましたが）、こういう仕事をして、定年後はこんなことをして、と全部書き込んでいます。そして、大切なのは書きかえることです。書いた通りにはいきませんからね。きっと役に立ちますよ。

あとは旅をしてください。できるだけ早いうちに開発途上国を訪れたら、多くのことを学ぶことができるはずです。自分で何かを変えたいと思う機会を持ってもらいたいと思います。

（市川さん） 日本で疑問に思うのは、マスコミの力が強く、流行に左右されやすいところです。流行に左右されない自分を持ってほしいと思います。自分は何がしたいのかをはっきりさせることができれば、自分の進む道に行けるのではないかと思います。また、ぜひ外国語を勉強してください。英語だけでなく、フランス語やスペイン語など。それから、専門分野をさらに向上させてほしいです。

インタビューを終えて… ネットワーカー記者の感想

今回参加してくれたネットワーカー記者と市川さん。左から、大矢くん、市川奈緒美さん、市川なな緒さん、櫻井くん、植田くん

なかなか時間のとれない久木田さんや市川さんから直にお話を聞けたのはとてもよい経験になりました。久木田さんや市川さんが北と南の格差をなくそうと一生懸命に仕事をしていることが実感できました。こうして今も仕事をしていられるのは「子ども達の笑顔」があるからだ、ということも分かりました。話を聞いていると、自分も早くこうした仕事につきたいと改めて考えてしまいます。開発途上国は今もがんばって、格差を縮めようと努力していて、先進国が生活を変えていかなければならないのに、我々は便利を求めているだけなのです。こういう便利さの追求はもうやめていかなければいけない、今我々は開発途上国にあるような人と人との関わり、元気のよさを取りもどさなければならないと考えてしまいました。一刻も早く格差がなくなり、久木田さんのおっしゃった、世界平和と自分自身の平和をかなえられるといいなあと思います。そして、世界の明るい未来を改めて願いたいと思います。　（櫻井 祐一 17歳）

久木田さん、市川さんとお会いして、何と元気な方たちだろうというのが第一印象でした。また、ユニセフ（国連児童基金）の名の通り心から子どもたちのことを考えていらっしゃることに感動しました。ユニセフの一員として働かれるときも、援助してあげるという考えでなく、一緒に子どもたちのために行動しましょうという考えに、国際協力の原点を見たような気がしました。国際協力には、さまざまな形の協力があることはわかっていたつもりですが、その根底にある精神的なものについて、いろいろなヒントをもとに、今自分が何をすべきかをしっかり考えて、将来、今回の企画が無駄にならないような活動をしたいと強く思いました。子どもの笑顔や元気がうれしいとおっしゃっていましたが、1日も早く世界中の子ども達の笑顔が輝く日がくるといいなと思います。そのため、ユニセフ子どもネットの一員として精進していきたいです。

（大矢 哲 16歳）

「国連の職員」は、わたしにとって本当にあこがれの職業なので、今回、久木田さんと市川さんから「ナマの声」をきくことができて本当にうれしいです。ユニセフは、豊かな国で生きる人たちと、貧しい国で生きる人たちとを結ぶ大切なかけ橋だと思いました。わたしたちの生活と開発途上の国ぐにでの生活は、ものすごくかけ離れていますが、「世界の人びとがみんな幸せになってほしい」と思う人は多いと思います。そういう人の願いを行動に変え、結果を出していく。お話を聞いていて、お二人の信念が伝わってきました。わたしは、インタビューが終わってから、試しに久木田さんの言っていた人生計画表を書いてみました。百歳まで生きられるかは別として、16歳の現在地から終点までに、やりたいことがたくさんでてきました。お二人にお会いして、夢を見るだけではだめで、見通しをもって行動していくことの必要性を感じたので、わたしの計画表も、何度も見直しながら、実現していきたいです。　（市川 なな緒 16歳）

ぼくは今回の取材を通していろいろ学びました。まず、子どもたちの教育のことです。現地の子どもたちは学校に行きたくても行けないということをよりくわしく聞けてよかったと思います。

特に女の子は小学校を卒業し中学に入る頃には結婚させられて中学に行けないという話には驚きました。

また、井戸水にヒ素が入っているということはある本で読んだことあったけど、まさか皮膚病になったりして被害が出るほどひどいとは知りませんでした。

また、ユニセフの資金は今まで政府が必ず出すものだと思っていました。しかしお話を聞いてユニセフの資金が自由拠出金だということも初めて知りました。

ぼくは今回の取材で得たものを、これからの進路や学習に生かしていきたいと思います。

（植田 浩光 16歳）

地図で見る世界の子どもたちのようす

HIV/エイズを知っていますか？

最大の危機が世界の子どもたちを直撃

2002年7月、スペインのバルセロナで「第14回国際エイズ会議」がひらかれました。これにあわせて、ユニセフやその他の国連機関は、あいついでHIV/エイズについての報告書を出しました。そこで伝えられた世界の現状は、10年前のどんな予測よりもひどいものでした。データによると、2001年末には、4,000万人の人びとがHIVに感染しており、HIV/エイズで親をなくした15歳未満の子どもは1,400万人にものぼっています。

HIV/エイズってなあに？

エイズは、後天性免疫不全症候群という名前の病気です。HIV（ヒト免疫不全ウイルス）がエイズを引きおこします。

HIVウイルスの感染源となるのは、血液・精液・膣分泌液・母乳の4つの体液です。ただし、その体液に触れたからといって100パーセント感染するわけではなく、また、空気感染したり、日常的な接触で感染したりもしません。

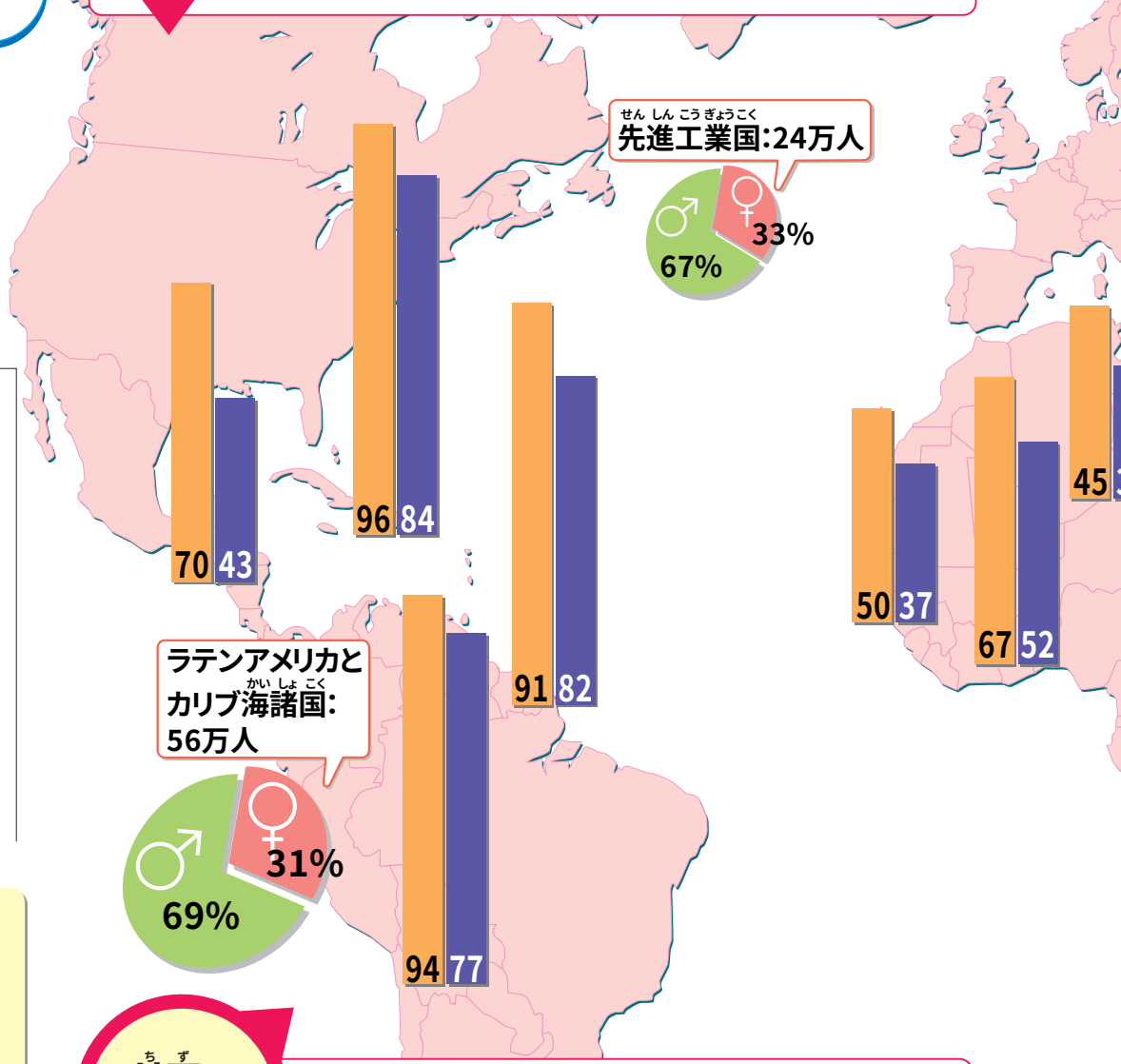
HIVウイルスは、血液中の免疫システム（体を病気などから守る力）をこわしてしまいます。そのため、細菌や病原菌、カビなどによって、健康な人であればかからないような病気になってしまったり、悪性のガンができてしまったりする、命にかかわる病気です。HIVウイルスに感染しても、すぐにエイズになるわけではありません。発病するまでに、5～10年ぐらいかかります。でも、発病していなくても、HIVウイルスを持っていれば、上の4つの感染源を通じて、ほかの人にうつす可能性があります。

今のところ、エイズを完全に治療できる方法は見つかっていませんが、発病を遅らせることのできる薬は開発されています。しかし、開発途上国では、こうした薬は高価で、ほとんど手に入りません。また、栄養や衛生状態の悪さなどがかさなり、先進工業国の患者より発病するのが早く、また、発病してからも十分な治療やケアを受けられることが少なく、多くが耐えがたい苦痛の中で、早くに命を失っています。

地図の円グラフ

HIV/エイズに感染した15-24歳の若者：
1180万人
そのうち 730万人が女性
450万人が男性
（出典：UNAIDS/UNICEF,2001）

円グラフの内訳、男女別
男 ♂　女 ♀



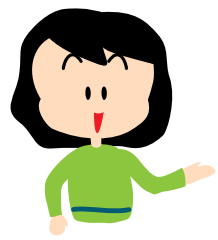
地図の棒グラフ

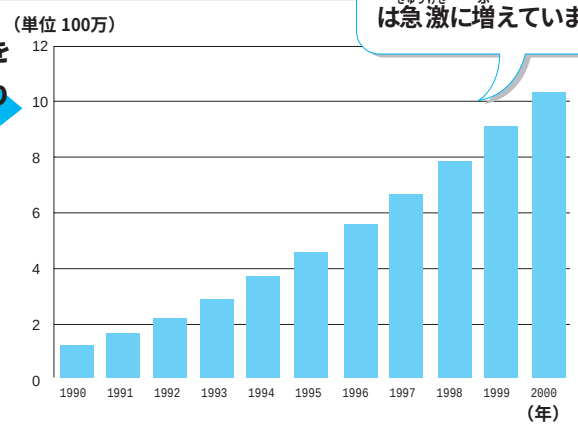
両親がいる子どもといない子ども（10～14歳）それぞれの学校に通う割合
（出典：MICS/UNICEF & DHS1997－2001）

両親がいる、または片親といっしょにくらしている子ども
両親を失った子ども

両親を失うと学校に通えなくなる子どもがふえているのがわかります。グラフでわかるように、エイズで親を失う子どもは急激に増えています。

エイズで母親または両親を失った子どもの数のうつりかわり（1990-2000年）





10代の若者に広がる感染。正しい知識を身につけることが何よりも大切

HIV/エイズがどのような病気で、どうしたらうつるのか、みなさんは知っていますか？　セックスなどが原因でうつることが多いこの病気について話すことは、多くの地域で敬遠され、タブーとなっています。また、この病気にかかった人に対する偏見もあります。そのため、子どもや若者がこの病気のことを知るチャンスが少なくなってしまったり、まちがったことが信じられたりしています。

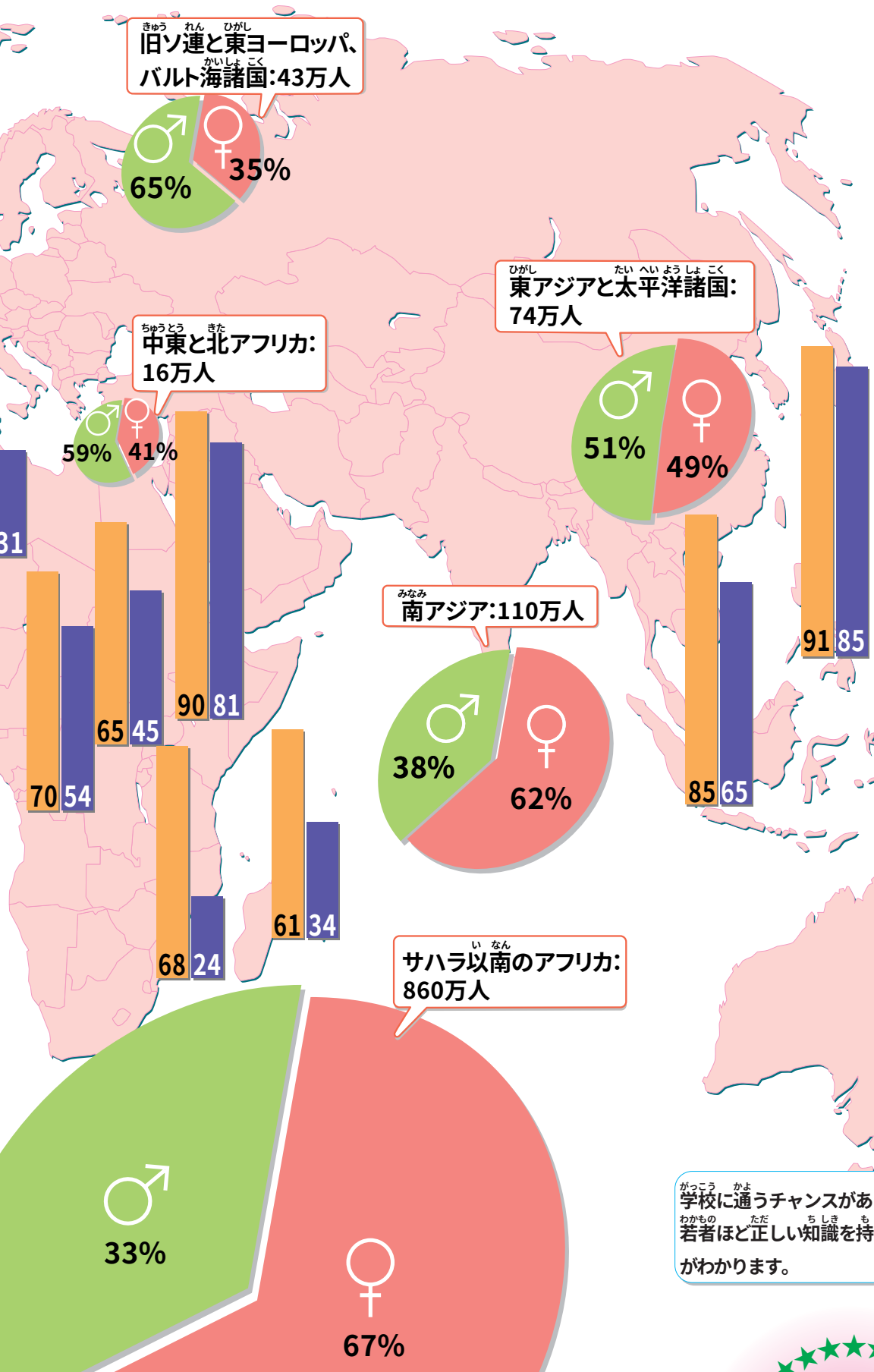
そこで、学校の授業の中でHIV/エイズのことを教えたり、若者たち自身が病気を防ぐための活動に参加したり、といった動きが広がりつつあります。

HIV/エイズの予防について、路上で寸劇を演じて人びとに伝えるボツワナの少女たち

©UNICEF/HQ01-0190/Giacomo Pirozzi

学校の授業で人形劇をやり、エイズについて勉強するタイの子どもたち

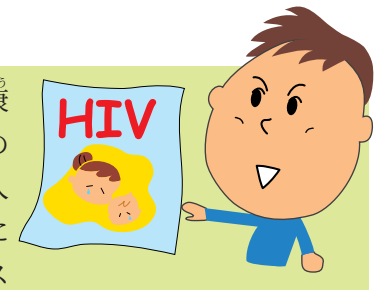
©UNICEF/HQ97-0211/Horner



ネパールでは…

ネパールでは、若者たちによって“親友とおしゃべり”というラジオ番組がつくられ、放送されています。この番組のテーマは、若者たちに共通の問題。たとえば、ボーイフレンドやガールフレンドとどのようにつきあったらいいか、両親との関係など。HIV/エイズを防ぐことも伝えられています。毎週100～200通もの手紙が届く人気番組です。

ペルーでは…



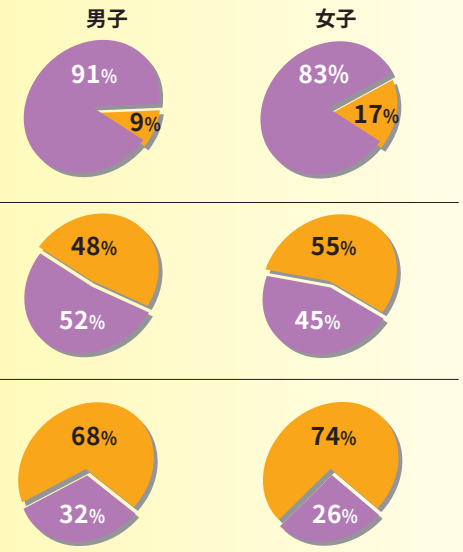
首都リマ市内の3つの地域では、健康な生活やHIV/エイズの予防についての研修を受けた10歳から24歳の240人の若者たちが、地域の子どもや若者に直接話をしたり、公共の場所にポスターをはったり、ラジオ番組で話したりして活動を続けています。これまでに、直接話をした若者は5000人以上、およそ45,000人以上の人が彼らのメッセージをうけとっています。

若者たちに伝えるエイズ予防のための3カ条

1. 軽々しくセックスしない
2. パートナーはひとりに
3. いつもコンドームを正しく使う

教育によって身につく知識

健康そうに見える人でもHIVに感染していることがある、と知っている15～19歳の若者の割合（カメルーンでの調査、1998年）



学校に通うチャンスがあった子どもや若者ほど正しい知識を持っていることがわかります。

ストーリー STORY

エイズで両親を失ったきょうだいがふたたび元気をとりもどすまで

［エチオピア］

エチオピアの東、鉄道の町ディレダワで3人のきょうだいが暮らしています。15歳の女の子マセレット、11歳の男の子ベスフェカッド、3歳の女の子テゼラシュ。製薬工場の守衛をしていたお父さんは、4年前エイズでなくなりました。お母さんもそれから2年後に、同じように息を引きとりました。3人は、頼る人も収入もなく、ただそこに残されました。

ディレダワで孤児のための教育センターを開いていたマスレシャが、ものごいをする3人のきょうだいを見つけたのは2年前でした。マスレシャは、かれらが近所の人たちに半強制的に町でものごいをさせられていることを知り、かれらの肉親をさがしまわりました。そして、3人と半分血のつながった兄が郊外で妻とくらしていることをつきとめ、3人がそこで一緒にくらせるようにはからいました。

しかし、兄とくらして5カ月、3人のようすはさらに悪くなっていました。兄は安定した仕事がなく、お酒を飲み、しばしば暴力をふるいました。兄の妻は、3人をこき使い、学校にも行かせませんでした。ベスフェカッドは家出し、ディレダワから55kmも離れたハラールの町でお茶売りをさせられているのを発見されました。

その上、兄がむりやりマセレットを結婚させようとしていることを知り、とうとうマスレシャは、かれらを自分の家で生活させることにしました。兄はかれらを連れもどそうとしましたが、3人は拒みました。兄に誘拐されることを恐れて、マセレットは新しい学校が決まるまで、学校にも行けませんでした。

3人は幸運にも引きはなされることなく、マスレシャのもとで安定した生活を取りもどしつつあります。マセレットは美容師になるための勉強をしています。マスレシャは話します。「エイズで親を失い、学校もやめた子どもたちはたくさんいます。孤児になった子どもは、差別や偏見にもさらされます。すべての子どもを助けたいと思いますが、限界があります。この3人は自分の子どもと一緒に、全力で育てていきます」

REPORT & INFORMATION 報告とお知らせ

お問い合わせやもうしこみは
ユニセフ子どもネット事務局
(日本ユニセフ協会 広報室内)
住　所：〒108-8607
東京都港区高輪4-6-12
でんわ：03-5789-2016
ファックス：03-5789-2036
電子メール：jcuinfo@unicef.or.jp

お知らせ　募集

ユニセフ子どもネットニュースNo.3
ネットワーカー記者募集

内戦にゆれるソマリアの今を聞こう！

次号では、アフリカの東はしにある国ソマリアの北部の町、ボサソのユニセフ事務所長をしている中井裕真さんにお話をうかがいます。ちょうど7月にはユニセフ親善大使の黒柳徹子さんがソマリアを訪れ、中井さんはその案内をしました。

中井さんはこれまで、ミャンマー、イラク北部など、紛争が続く地帯で仕事をされてきました。長い無政府状態の後、ようやく政府ができましたが、まださまざまな勢力の間で争いが続き、混沌としています。そのような中でユニセフが活動するとはどんなことなのか、ソマリアの子どもたちはどんなようすか、ぜひみなさんの言葉で聞いてください。記者がはじめての人もだいじょうぶです。どんどん応募してくださいね。

■ネットワーカー記者募集人数：4～5人（応募者が多いときは、抽選または選考します）

■応募方法：右にある1～5までを書いて、郵便、ファックス、電子メールでユニセフ子どもネット事務局へ送ってください。

■しめきり：**9月18日（木）**

インタビュー日は9月28日（土）の予定です。

ネットワーカー記者の交通費は日本ユニセフ協会が負担します。

これを書いて送ってね

1. ネットワーカー番号
2. 名前
3. 学年（年齢）
4. 住所、電話などの連絡先
5. 中井さんに聞いてみたいこと

MESSAGE

ネットワーカーのみなさんからのメッセージ

ユニセフ子どもネットニュース創刊号を読んで

世界にまだまだ困っている子どもがたくさんいることがわかり、とても勉強になりました。(井上 鈴香　12歳)

関西の人の記事がのっていなかったのが残念です。関西でも学習会やりたいです。(橋本 優太　10歳)

私は、「商業的性的搾取」とは何だかよく分からなかったんだけど、分かりやすい話になっていてよかった。あと、ネットワーカーの感想がたくさんのっていたので、身近に感じることができました。(大沼 芙実子　12歳)

「アフガニスタンの子ども達は今」を読んで思ったことです。アメリカは昔、日本に原爆を落としてたくさんの人の命を奪ったのに、アフガニスタンでも地雷や報復戦争でたくさんの命を奪っています。私はアメリカにイエローカードを出してほしいです。(浅岡 真理子　18歳)

ワールドカップの影響で、テレビであまりアフガニスタンやイスラエルのようすが報道されずわかりませんでしたが、そんなときに、記者の人たちのインタビューでくわしいことがわかりました。とてもよかったです。ぜひ世界会議に参加した他の国の人の感想も聞いてみたいです。(N.啓子　14歳)

今回の創刊号、とても分かりやすく、興味深かったです。中でも、アフガニスタンの子どもたちのことをとりあげた記事が、私が今まで思いこみで、アフガニスタンは貧しい暗い国だと思っていたけれど、違うんだなと思いました。そして、人びとがよい暮らしを送れるようになっても、まだまだ地雷などの問題は残っているということも難しい課題だと思いました。今度は子ども兵士のことについても知りたいです。(中佐 友衣　15歳)

子ども達が、学校に行けないと分かり、わたしは行けるのにかわいそうだなと思いました。サヌータだけではないけれど、子どもが売られてしまい、親に会えなくて、誰かにだまされたと分かって、かわいそうでたまりません。私だったら絶対に許せません。(原島 渚　9歳)

各地域での学習会の報告

関東学習会　6月22日

6月にひらかれた関東の学習会では、昨年の横浜会議に参加したネットワーカーが昨年度の活動を説明した後、今年どんなことをしたいか自由な話し合いをしました。そこでは、「現地の活動を見てみたい」、「もっとネットワーカーを増やしたい」、「ビデオや映画をつくりたい」、「ユニセフ子どもネットの歌をつくろう」、などのアイディアがたくさん生まれました。

九州学習会　8月7日

九州では、第3回学習会が、8月7日に福岡市中央児童館でひらかれました。主なテーマは「子どもの兵士」。ビデオや資料を使って学習とディスカッション、そして、「子どもの兵士が命令されてする殺人は許されるか？」(ただし、子どもはおとなの兵士に、敵の子どもの兵士を殺すよう命じられたとする）というテーマでディベート（「許される」という立場と「許されない」という立場にわかれて、それぞれの意見をたたかわせること）をおこないました。少人数でしたが本音を熱く語り合うことができ、充実した1日でした。　(新田真之介)

原画展　8月20～23日

また、福岡県のネットワーカーが協力して、8月20～23日まで福岡市中央児童館で、子ども買春や人身売買を伝える絵本『子どもの権利を買わないで～プンとミーチャのものがたり』の原画展を成功させました。会場との話し合いや、ちらしの原案づくり、新聞やテレビへのはたらきかけなど、すべてネットワーカーが行いました。新聞にも大きく取り上げられ、また開催期間中はテレビの取材もあったそうです。

いろいろなかたちで学習会

小山みどりさんは、ユニセフ子どもネットワーカー以外の人びとにも呼びかけて、新潟で学習会をおこないました。

昨年11月18日、横浜会議（第2回子どもの商業的性的搾取に反対する世界会議）に向けた学習会をひらきました。10数名の高校生が企画し、幅広い年齢層の人が参加しました。その中で子どもへの暴力防止にとりくんでいる団体“CAP新潟”の指導で護身術を体験しました。いじめや虐待などの暴力にあったときに、何ができるかを学ぶプログラムです。口をおさえられたらその指をはがしてみる、大声を出して助けを求める、などを体験しました。最初は声が小さかったけれど、最後には会場がわれるほどの声を出すことができました。「権利」を体感でき、それが子ども買春を考える上でも意義がありました。学習会を経て、子ども買春が身近に感じられなかった人も、なくしたい、もっと知りたい、伝えたい、という意見になっていきました。ひとりではできなくても、多くの人が立ち上がれば世界は変わると思います。　(小山みどり)

＊学習会を企画するときには、まず事務局と相談してください。
＊九州と新潟の学習会のくわしい報告書は日本ユニセフ協会ホームページのユニセフ子どもネットのサイトに掲載予定です。（www.unicef.or.jp）
（ユニセフ子どもネットのサイトは新しくなりました！ ぜひのぞいてみてください）